

海道東征かいどうとうせい

中村 龍介

一九四〇年。この年は皇紀二六〇〇年とも呼ばれ、神武天皇が即位されてから二六〇〇年に当たる。余談だが、私の生まれた年でもある。

この年、様々な記念行事が催され、たくさんのお祝いの楽曲が奉納された。その中のひとつが海道東征だ。作詩は北原白秋、作曲は信時潔。曲の形式は『交声曲』と呼ばれるが、平たく言えばカンタータ。オーケストラをバックに『声』の部分がひとつの物語を歌いあげる。

海道東征で歌いあげるストーリーは、神武天皇の東征。即ち、九州の日向から瀬戸内海経由、海路、大和を目指して東征する冒険の旅で、古事記等の神話に基づいて作られている。

華やかにデビューした曲は当初は各地で演奏されたが、太平洋戦争敗戦にともない、国威発揚の危険な曲としてGHQにより長期間封印されてしまう。

戦後七十年、信時潔の没後五十年を迎える頃から完全演奏を求める機運が高まり、二〇一四年二月、建国記念の日に熊本で本格的な演奏が披露された。その後、大阪と東京でも演奏されるようになるが、その頻度は極端に少なく、東京のコンサートホールで公開された演奏は、私の知るかぎり、今年四月、池袋の東京芸術劇場で行われた演奏会だけである。

私は、この演奏会に何となく行きたいと考えていたが、前売りチケットがアツという間に売り切れてしまい、補助椅子の席しか残っていなかったので見送った。

ところが、このコンサートの反響をネットや新聞で見る度に、何か大きなモノを取り逃がしたような感覚に襲われるようになった。特に、海道東征のソプラノ部分を受け持つ歌手の幸田浩子は、過去にも二度歌った経験から、神武天皇が通ったとされる海路に特別な思いを持つようになり、昨年の夏、小型船舶の免許を取得。島々の姿を目にし、海風を感じると、この曲を思い返すという。そこまでやるほど魅力的な曲なのか。

実は、私は信時潔の曲にそれほど好印象を持っていなかった。彼の代表作といえば『海ゆかば』。しかし、これを聞くと何とも凄惨な感じが拭えない。尤も、これは作曲ではなく作詩の問題なのだが。

海行かば うみゆ 水漬く みづ 屍 かばね

山行かば やまゆ 草生す くさむ 屍 かばね

「海を行けば水に浸かった屍となり、山を行くと草蒸す屍となる」と歌う

最初の二節だけで、勇壮な雰囲気は吹き飛び、次に進むのを躊躇してしまふ。以下は、「大君の足元にこそ死のう。後ろを振り返ることはしない」と続く。この曲は軍歌として分類されるが、励ましよりも惨たらしさが前面に出て、決して好きにはなれなかった。一体だれの作詩だろうと調べてみて驚いた。

この歌詞の出典は万葉集だという。大伴家持の詩に全く同じものがあつた。有力説によると、キリスト教の信者だった信時は『ルカ伝』第九章の記述に似た詩を万葉集の中に見つけ、それを歌詞として曲をつけたとされる。

『海ゆかば』から「天皇陛下万歳！」を連想して、大君を昭和天皇のことと勝手に捉えていた私は、寡聞を恥じるばかりである。

一般に、歌もの楽曲（歌詞を伴う作曲）では、『詩先』か『曲先』かという問題がある。つまり、完成した詩に曲をつけるのか、出来た曲に詩をつけるのかという問題だ。選択肢の大きさから考えると答は簡単だ。

メロディを作るときには、リズムを抜きに考えると、一つの調べの中には、ドレミファソラシドの七つの選択肢しかない。一方、詩作では、言葉という無限に近い選択肢が横たわっている。つまり、選択の幅という尺度でみると、『曲先』は『詩先』に較べてはるかにフレキシビリティ（弾力性）が大きいといえる。『詩先』はそれだけ難しいということでもある。

信時潔は典型的な『詩先』型だ。彼の残した千曲近い作品の中には歌詞を伴わないピアノ曲などもあるが、大半の作品は既存の詩に曲をつけたものだ。ある意味では、詩という作品にメロディをつけることで作品としての価値を更に高めたい、と信時は考えたのかもしれない。

一方、北原白秋の詩だが、正直、私は白秋の詩といえば、この道、ペチカ、からたちの花、砂山：といった有名な童謡の歌詞しか知らない。ところが、白秋の海道東征は、童謡にあるような叙情的な感性とは全く次元の違う作品なのだ。この詩の第一章「高千穂」は次のように始まる。

神坐しき、蒼空と共に高く、み身坐しき、皇祖。

かなり我が中空、窮み無し 皇産霊、

いざ仰げ世のことごと、天なるや崇きみ生を。

何度読み返しても、何のコツチャだし、何処まで読んでも「？」なのだ。解説によると、この三行は次のように読むのだそうだ。

我らが皇祖の神々は、蒼空のように高く、遥かかなたの高天原に住まわれていた。

高天原へは広大な空間が広がり、
 万物を生む神々の力はかぎりない。
 さあ仰ぎ見よ、生み出される全てのものを
 崇高な神々の誕生を。

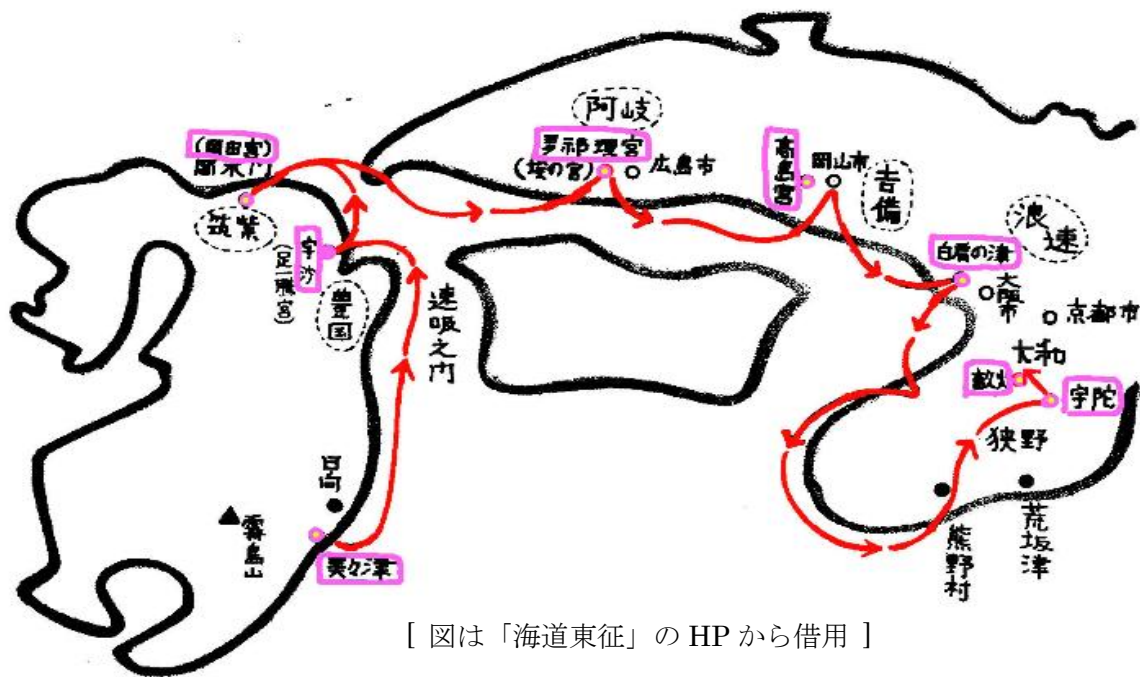
これが、「白い花が咲いたよ」とか「青い青い針のとげだよ」などの詩を作った人の作品とはとても思えない。海道東征を作詩した白秋は、私たちの花を作った白秋とはあきらかに別人だ。

白秋は、海道東征を作るに当たって、これまでの叙情詩を捨てて叙事詩に挑戦したのだ。古典文学の権威、風巻景次郎も海道東征を「莊嚴なる古典調叙事詩」と呼んでいる。近代詩人としてたくさんの名作を残した白秋だが、詩人としての人生を締めくくる仕上げの作品として叙事詩を選んだのだ。

作曲の信時潔にしても、実は文筆家としても名をなしている。晩年は谷崎純一郎や和辻哲郎らと同人雑誌を作っていた。だからこそ、白秋の詩を目にして、「北原先生の詩の見事さに力を得て曲の大骨の見当がついた」と、大作の作曲に着手する決心がついたので。

今般、関東で今年二度目の公演が十二月十九日に自宅から三十分のところにある「ミュージア川崎」にて、東京交響楽団の演奏で開催されることが決まった。ソプラノはあの幸田浩子だ。チケットを握りしめて楽しみにしている。

【二〇一七年十月記
 原稿用紙 約八枚
 課題「？」】



[図は「海道東征」の HP から借用]